

シリーズ “ シカゴの企業戦士たち ”

先月4月号の降旗氏、岸岡氏の記事からもわかるとおり、今から約40年前、日本はまだ後進国で、日本人ビジネスマンは、アメリカでは苦勞の連続でまさに“企業戦士”でした。4月号に続き、1961~1964年、日本航空 Chicago 営業所代表駐在員でおられた伊藤恒氏にシカゴの企業戦士としてどのような経験をされたかをご執筆頂きました。

私は1954年戦後日本の再建復興のもとでナショナルフラッグキャリアーとしての使命を持って国際路線を開設することになった日本航空に入社をした。7年後の1961年5月、憧れの海外勤務の辞令が出た。

“シカゴ営業所勤務を命ずる。給与はUS\$420”であった。

親類や友人の中には本気で“アメリカ行きは素晴らしいことだがシカゴはアルカポネの残党のいる汚い危険な都会、くれぐれも気をつけて”と云う人もいた。当時の日本航空はサンフランシスコまでJET機の代表格のダグラス-8型機でウェーキ島、ホノルル経由で約30時間で乗り入れしており、あとはシカゴまでは米国内線の覇者UAL機の利用を余儀なくされていた。私は先ずオヘア空港の広大さ、シカゴ市内に通じる高速フリーウェイ、高層建築の立ち並ぶシカゴ市街、美しい芝生に映えるミシガン湖畔のレイクショアドライブに目を見張った。

当時のJAL Chicago営業所は2人の日系2世を含む7人の米国人スタッフで営業所長も米国人、私は副所長、日本人社会と日本人旅客に対しては代表駐在員という複雑なタイトルの職責であった。事務所は60 E. Monroe St. 当時の所謂エアライン街で隣近所にはPAA, NWA, TWA, AF, LH, といった世界の一流会社が大きな店舗で軒を並べていた。国家的使命感と米国旅行観光業界への向学心に燃えていた私は、お陰で時ならず社内の米人職員、エアライン業界人そして新進気鋭の日本企業のマネージャーの方々に融合することが出来た。シカゴの市民、在留邦人、総領事館の皆さん、日本人駐在員の方々が大変親切且つ友好的で急成長を続けるシカゴにあって素晴らしいコミュニティが形成されつつあった。

1952年に初めて戦後にシカゴ進出を果たされた第一銀行に続いて1954年につつましい出張所を開き困苦精勵をされたわが社の初代の所長は日本人2世の山田重夫氏であった。当時は航空大量輸送時代の曙、快速大型のJET機の導入で旅客や貨物の輸送は急速に発展の道をたどっていたとはいえ私がシカゴに駐在した1961~1964年間の日本と米国中西部との貨客の交流はいまだに限定されていた。今日でこそ日航はシカゴ-日本間を直行便で結んでいるが、当時のシカゴではNWA社のみが戦後の不平等な有利な日米航空協定に基づいて東京乗り入れをしており日航利用の場合はまずUAL機でサンフランシスコまで飛び、乗り継ぎをしなければならなかった。このため後発の日航のビジネス拡大には大変苦勞をさせられた。

それでも日系邦人や日本企業の皆さんは幸いにも“鶴の翼、日本航空”の発展を援助するために不便を覚悟で利用をしてくださった。日本企業の典型的戦士の1人として忘れられないファイターJCCCの初代会長の田中留次郎丸紅支店長は私の大学の先輩でもあり率先して“Fly Japanese”を提唱して下さった。当時は1ヶ月に1度エヴァンストンの日本総領事公邸に於いて各社の支店長級の方々が集まり事業報告、市場予測等の打ち合わせ会がありその後は総領事以下幹部の方々を交えての夕食会、有志によるナイトキャップ、マージャン会が催され、我々にとって最高の楽しみと憩いの場であった。

田中支店長は各社の代表が日本出張の一時帰国にNWA機を利用されたのを知ると大きな声の関西弁で“なんでJALを使われないのですか？乗り継ぎはあっても日本の翼のサービスは最高ですよ。みんなFly Japanese でやりましょう！”と私が恐縮するのを尻目に堂々と率直な意見を述べてくださりハンデキャップを負ったわが社を激励してくださった。しかし本人が日航機で日本出張から帰って来られると私に呼び出しがかかり誠に厳しい言葉で“伊藤さん、あんたともあの程度のサービスではNWAに勝てまへんで、もっと頑張らにゃ。”と愛情をこめたお小言と激励を頂くのが常であった。

私は日本からのたった一人の派遣員、当時の若さと情熱で日に夜を継いで走り回った。日本からウェストコースト経由で夜遅くUAL機でオヘア空港に到着される日本人VP 旅客を迎えウィークエンドも返上して空港アテンドサービスをした。ひどいときには一日に2、3度も空港詣でをさせられた。

1964年の東京オリンピックは米国人に日本東南アジア諸国の魅力を伝える大きな足がかりとなったものの中西部の人たちにとっては日本は遠い芸者と富士山の神秘的な国、我々日本人旅客にとってシカゴは“アルカポネとスピークイージーの町、火事も凍るといわれる寒い冬とストックヤードの町”であった。アメリカ人に日本旅行を売るのになかなか骨の折れる仕事でどんな機会も見逃さずプロモーションをして歩いた。中西部の町々で日本観光物産展のような催しを開いたりロヨラ大学の世界演劇 dayでは俄か勉強で“日本演劇の一般的概念”なるスピーチをしたり、綱島領事のお供をしてイリノイ州博覧会ではわが国がイリノイ産大豆の主要な輸入国であるとの有利な立場を利用して当時のコーナー知事に V S I JAPAN のプロモーションを仕掛けたりした。機会あるごとに私の家内も動員してシカゴのデパートの日本プロモーションブースで3日間着物を着て日本案内に精を出してもらった。

私の多種多様なセールス PR活動でもっとも印象に残るのは1962年12月6日ミシガン通りで行われた“OLSON'S ORIENT GUIDE”の出版記念の行事である。欧州の旅行案内で著名なHarvey S. Olson氏も初の東洋案内本とあって地元のTV局やマスメディアの取材陣がMain Street Book Storeの前に集まった。この催しに協力を約束したわが社ではMiss日本、香港、シンガポールをシカゴに招致して美しいコスチューム姿で人力車と三輪車に分乗して凍りつくミシガン大通を行列すると言う無茶な派手な計画であった。東洋系の車引きを用意せよとの依頼で3人のイリノイ大学留学生を予約しておいたが出発の時間になっても現れない。TVの放映時間の関係上スタートを遅らせることも出来ず私とわが社の2世のMr. Utsunomiyaが人力車に美女を乗せてのミシガン通り大行進となった。当時の総領事館のビル前で総領事や館員の方々が必死の形相で車を引っ張る我々を見て驚きの声を上げられた。その出発式にはやっと1961年に開所された日本国際観光振興会の初代所長須藤幹夫氏も参加された。

今から45年前に初の海外駐在を無事に果たして以来私は東京、ニューヨーク、ロンドンなどで勤務を続け1988年にはニッコーホテルズUSAの会長として3度目の米国入りをしホテルニッコーシカゴの社長も兼務した。1987年10月のホテルオープニングセレモニーにはサーゲオルグシヨルテイの率いるシカゴシンフォニーが君が代を高々と演奏してくれ今昔の感を深くした。

私のこよなく愛するシカゴで今も営々と活躍を続け

られる日本企業の皆様、JCCCの会員の皆様、シカゴ在住の同胞の方々のご繁栄とご幸福を祈っております。



1962年12月6日
Olson's Orient Guideの出版記念プロモーション風景
左より2番目：Mr. Olson 5番目：須藤幹夫氏
7番目：人力車を引っ張る伊藤 JALシカゴ代表駐在員

伊藤 恒 氏

略歴

- 1954 日本航空株式会社入社
- 1961~ 1964 Chicago営業所代表駐在員
- 1964~ 1972 東京本社勤務
- 1973~ 1975 米州副支配人
- 1975~ 1981 本社国際旅客部長
- 1981~ 1985 欧州アフリカ地区理事総支配人
- 1985~ 1987 日本航空開発株式会社代表取締役副社長
- 1988~ 1992 Hotel Nippon USA Chairman CEO.
- 1993~ 2000 トラベルジャーナル旅行専門学校理事・校長
- 2000~ 2006 3月〔財〕日本ホテル教育センター特別顧問

* お詫びと訂正

JCCC4月号4ページ写真の説明について下記のようにお詫びと訂正を申し上げます。
誤) 古瀬氏 (安田 伊藤忠) 正) 古瀬氏 (安宅 伊藤忠)